



第2部 シンポジウム資料

鷹ノ原城跡と文化遺産の活用

南関町教育委員会 坂本重義

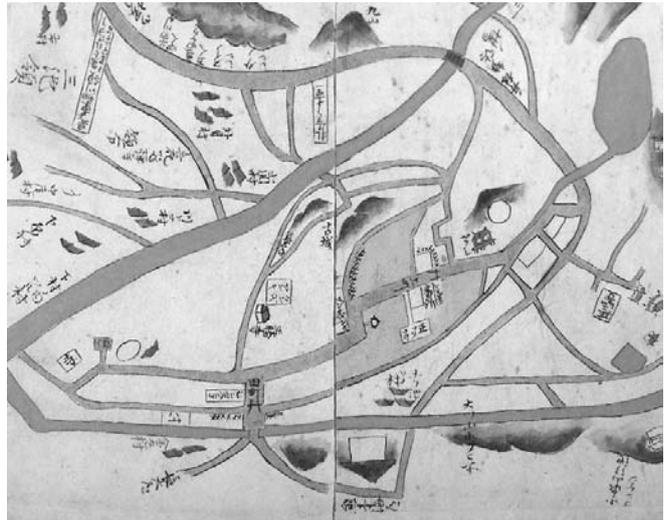
南関宿場町伝楽人 野口第三郎

1 鷹ノ原城跡（南関城跡）

i 城跡の概要

位置と城下町

鷹ノ原城跡は、南関町大字関町字城原（城域が一つの字域となっている）にある。南関町役場北側に、東西に長くのびる標高100mの台地を4本の堀切が分断し、東から二の丸、本丸、三の丸という配置となる。城域は支城としては不釣り合いなほど広大で、東西の全長は600mを越え、曲輪の総面積は90,000㎡を測る。三つの曲輪の中で最も広い三の丸は、熊本城二の丸公園を彷彿とさせるおもむきがある。



南関町絵図「肥後国誌付図」より

築城とともに城の南側裾部には、城下町としての関町が形成された。『南関紀聞』に「(慶長)6年に轟嶽(つづらがだけ)麓五十五間の町を引きて南関町を立る」とある。現在大津山(轟嶽)の麓の大津山神社の近くに小字として「古町」の地名が残っており、『上井覚兼日記』に見える「大津山町」と考えられる。大津山町の住民が、約1km離れた地点に移住させられて関町が作られたのである。

大津山町の住民が、約1km離れた地点に移住させられて関町が作られたのである。

熊本城下札の辻から植木、山鹿を通ってきた道路(豊前街道)は、関町の町屋敷に入って3か所で直角に折れ曲がり、屈曲部を境に田町、中町、上町と町名が変わる。街道の両側は短冊型地割りとなっている。

一方城の裏手にあたる北側には、長谷(ながたに)と呼ばれる深い谷が東西方向に長く横たわり、天然の要害そのものの観を呈する。

城の名称

鷹ノ原城跡の名称は、もとは「関ノ城」もしくは「南の関城」などであったが、築かれた場所の地名が「高原」であったことから、江戸中期から「高原城跡」、「鷹原城跡」と呼ばれることになった。現在城域は「城原(じょうのはる)」という字名で、東隣の台地が字「鷹原」である。もとは両方とも「高原(たかのはる)」と呼ばれていたものが、城が築かれたことにより当該部分のみその廃城後「城原」に変化したものと思われる。

築城と城代

鷹ノ原城築城の細かい経緯はわからない。『南関紀聞』には慶長5年に、南関城代加藤美作守正次の願いにより築城を開始し、清正自ら築城予定地の「高原」に登り、縄張りを行ったと書いてあるが、清

正は、この前年ごろから熊本城の普請や、佐敷城、内牧城など境目の番城の強化にとりかかっており、南関新城（鷹ノ原城）の普請もこのころ始まったと推測される。また、時の城代も正次ではなく、加藤清兵衛であったことを森山恒雄氏が明らかにしている。

加藤美作守正次については、城のかたわらに日蓮宗で本妙寺末寺としての東光院を建立したこと（今も地元でトコエンと呼ぶ場所がある）、大津山阿蘇神社の拝殿を建立したこと、知足院という寺の本尊厨子一字を寄進したことなどが『南関紀聞』に見える。

慶長16年（1611）6月、清正が死亡した直後に毛利藩の密偵が、北九州および肥後熊本に侵入し、肥後内の支城、武備、家臣団の石高など細かく調べており、その報告書が山口県文書館に残っている。「肥後国熊本世間取沙汰聞書（慶長17年）」がそれで、その中に「肥後之壹国内城数之事」として、

八代城	3千石	井藤新五左衛門尉、
宇土の城	3千5百石	中川太郎半（平）、
佐敷城	8千石	加藤與左衛門尉、
水俣城	3千5百石	中川しやうけん（将監）、
内牧城	壹万石	加藤（右）馬允、
南の関城	壹万石	加藤たんこ（丹後）、
高瀬の城	8百石	せ田又左衛門尉、
矢部の城	壹万石	加藤万兵衛、

と8支城（豊後2城は省略）と城代およびその石高が列挙されている。

南の関城に関しては、城代が「壹万石 加藤たんこ」と書かれており、慶長4年（1599）ごろから南関城代であった加藤美作守正次に代わって、その子息の加藤丹後守正長の名が見える。

鷹ノ原城は、元和元年（1615）一国一城令により、ほかの支城とともに廃城となったと考えられる（『南関紀聞』は元和2年とする）。

ii 検出遺構

本丸の盛土

本丸の南半部に設定した調査区において、大規模な盛土（嵩上げ）の痕跡を検出した。現地表から約4.3m下に旧地表を、その下の旧耕作土層、さらにその下に縄文土器を包含する土層を確認した。この旧地表の高さは、二の丸や三の丸と同等のレベルとなる。盛土に要した土の量は、10トンダンプにして8,000台分である。

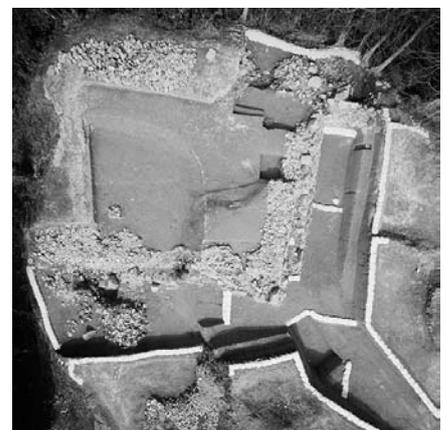
隅櫓台跡

本丸の北西端部で、隅櫓台跡の石垣を検出した。隅櫓台は、熊本城戌亥櫓のように、横矢掛りを2箇所突出させる形式のものである。

発見した石垣は城が完成した時点では地下に埋め殺される、いわば「捨て基礎」にあたる部位の石垣である。目には見えない地下に少なくとも3m～3.5mの基礎石垣が築かれていたことになる。

本丸西虎口跡

本丸には東西2箇所虎口が造られており、西側を西虎口跡、東



隅櫓台跡

側を東虎口跡と名付けた。

西虎口跡からは、90度折れる通路と、それを両側から挟みこむ石垣、門の礎石などの遺構が出土した。

熊本城の西大手櫓門の周辺によく似た虎口の形態が想像される。虎口は、もともとは高さ3m程度の石垣で両側を固められていたと考えられるが、破城によりおおかたの石垣は壊されており、わずかに基底のみ残存していた。通路の長さは突き当りの石垣まで約50m、幅は8.6m。

石垣に突き当たると通路は左（北）へ直角に折れ曲がる。曲がるとやや幅を減じ、6.8mとなる。折れ曲がったところに門があって、門を潜り抜けると通路の右側の石垣は東へ屈曲する。

門は、櫓門形式であったろうと推定しているが、詳細は不明である。門扉は幅1間の2枚扉が想定され、左脇に小門（潜戸）が付属していたと思われる。

本丸東虎口跡

2か所目の虎口跡は、本丸東虎口跡と名付けた。門跡は南に面し、後方に控柱を有するもので、その礎石を4基検出した。前面の柱と柱の間隔は約6m程度と考えられ、潜戸の小門が付属していたものと想像される。門の形式は、西虎口跡と同様櫓門であったろうと推察している。

東虎口と西虎口の門跡を比較すると、その全幅において東虎口の方が1m広い。よって本丸の正門は、東虎口であろうと思われる。

東虎口の門の周辺は、熊本城南大手門に近似したプロファイルが想像される。

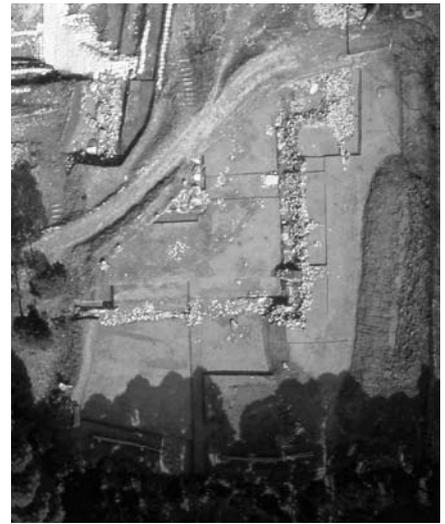
本丸の石垣

本丸の調査では、石垣もしくは石垣の痕跡を25面検出した。石垣墨線の方法はぴたりと南北あるいは東西に合わせられ、ほとんど狂いが無い。築石・角石はすべて阿蘇-4と呼ばれる阿蘇溶結凝灰岩で、地元で豊富に取れるものである。

鷹ノ原城（南関城）は、15、6年という短命の城であったにもかかわらず、石垣の切り合い関係、二重の石垣など、増改築の痕跡も数箇所で見受けられる。

石垣の破却については、出隅部が甚だしく、根石まであと数段というくらいまで徹底的に壊されている。逆に入隅部は比較的残りがよいが、それでも天端から5mばかりはどこも壊されており、破壊の凄まじさを遺憾なく物語っている。

ここでは第7面石垣のみ紹介するにとどめる。



本丸西虎口跡



本丸東虎口跡



本丸の石垣

本丸西側斜面において、長さ26mにわたって検出した。北端部は出隅となり、第8面につながる。本城跡における発見第一号の記念すべき石垣である。

築石の面（ツラ）の大きさは縦25～50cm、横40～90cm程度で、いびつだが長方形のものが多く、横長に据えられる。積み方は上下にゆるい波状を呈するが、大体横目地が通っている。ただ基底部から5mばかり上がったあたりでは目地の通りが悪く、布積みと呼べない状況になる。

北端部の角石は、2段のみ検出した。角石はツラの面積において築石の倍以上もあるような大きなものを使用している。2のうち上の石が控えを、下の石がツラを西へ向けている。一応ツラと控えを交互に左右にむける算木積みの様相がうかがえるが、2石のみでは全体的な形状の把握は難しい。

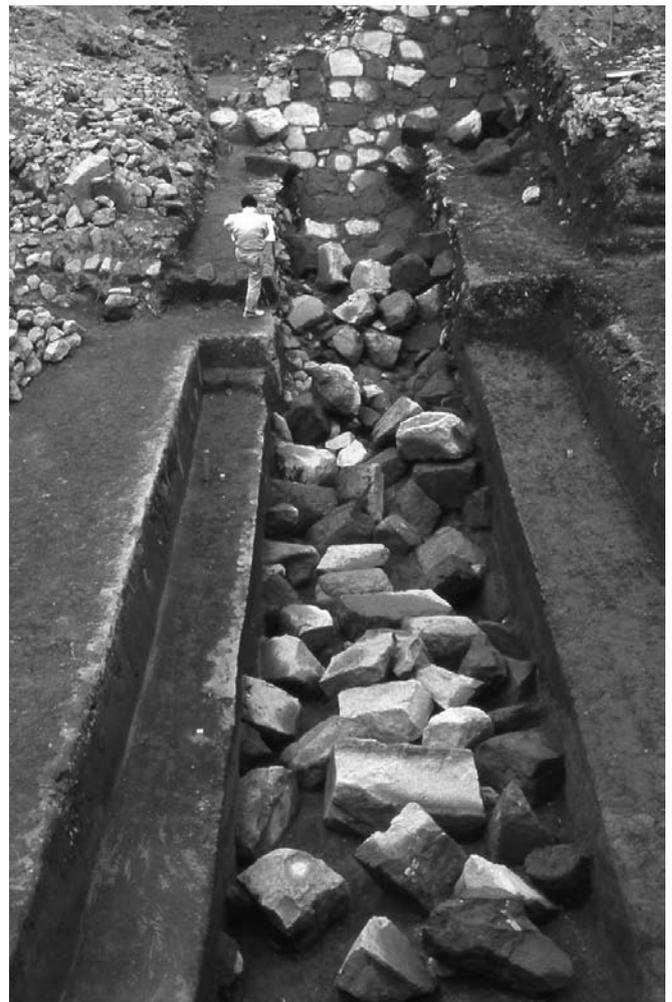
角石稜線部の勾配は37.5度と大変緩い。ちなみに、熊本城天守台石垣の南西角石の地上2石目の稜線部勾配が、38度弱、同じく南西隅角部のそれが40度を測り、またいわゆる二様の石垣の古い方が37度であり、鷹ノ原城跡のそれと非常に近似した数値を示していることは、大変興味深い。

iii 破却

鷹ノ原城跡は、築城開始からわずか15、6年で、一国一城令により破城されたといわれており、実際に発掘調査してみると、そこかしこに破城の痕跡が見受けられる。しかもその破却の仕方は生半可なものではなく、城が存在したことすら否定してしまうばかりの凄まじさであり、堀切以外の城の痕跡をすべて土中に葬り去って、もとの台地に戻ってしまった観がある。

鷹ノ原城跡では、破城のされ方が大きな見どころのひとつとなっている。特徴的な破城の痕跡とは、石垣を壊しその壊した石材を一つひとつ運んで、空堀の底一面にびっしりと敷き詰めて、堀の斜面を削った土で覆い隠していることである。このことは、本丸を囲む堀切の底2か所で確認した。ここにおいて、堀切底部はどこも壊された石材でびっしりと埋め尽くされているであろうことを、容易に想像することができるであろう。

壊した石材をそのままにせず、別の場所に運ぶという行為はどういうことか。石垣の破壊は当然上の方から行われるが、ある程度下方まで作業が進むと石垣崩しの限界が来る。それは崩した石材が石垣の近辺に溜まってしまい、それより下を崩すことができなくなってしまう。作業ができなくなったらそれで石垣崩しは終了してよいわけだが、本例はそうではなかった。溜まっ



堀切底部の石材

た石材を片付けているのである。というより片付けながら石垣の破壊作業を続けたのであろう。

片付けながら石垣を壊すということは、より下方まで壊すことを意図した方法であり、単なる見せかけのような破城ではなく、本気で城を破壊するという気合の入ったやり方を意味する。結果的に石材は堀切の底にまんべんなく押し広げられ、敷き詰められた格好になった。

また、本丸西側石垣の調査において、地下1.1mの深さから寛永通宝が1枚出土した。破却時の土砂に混入していたことは明らかで、後世の攪乱による流れ込みではない。この寛永通宝は鑑定の結果、寛永13年(1636)から水戸で鑄造が開始されたもので、「古寛永」と呼ばれているものの1枚であった。

この寛永通宝の出土により、破城は一度だけでなく、少なくとも寛永13年以降のある時期にもう一度行われた可能性がある。ではその時期はいつか、残念ながら文献によってその時期を確定することはできないが、肥後では天草・島原の乱の後、寛永15年に国内の廃城を再調査し、水俣城や佐敷城あるいは竹迫城など、破却の不十分な城は再度の破却に及んでいることから、本城跡も同時期に2度目の破却が実施されたのではないと思われる。

iv むすび

鷹ノ原城跡(南関城跡)は、織豊系城郭の要素を十分備えていた城郭であったということが次第に明らかになりつつある。高石垣、礎石・瓦葺建物、枡形虎口、石垣の折れなどまさしく織豊系城郭のセオリーに則って築かれた城であった。破城についても、非常に特異なやり方をしていることが判明し、かつ複数回実施されていることが、ほぼ確かめられた。

鷹ノ原城跡(南関城跡)は、石垣を持つ城跡では県北では唯一の遺跡であり、しかもほとんど開発にも遭わず、極めて良好な保存状態で残っている。この遺跡を加藤清正が、郷土に残してくれた大いなる歴史遺産として大切に、また現代に生かしていかなければならないと思っている。

2 史跡豊前街道南関御茶屋跡

i 南関御茶屋跡の創立と歴史

南関御茶屋の史料上の初見は、永青文庫に所蔵されている寛永17年(1640)の『御奉行所奉書』であり、南関御茶屋の建て替え工事が長期に渡っている、という内容のものである。建て替え工事と言っているので、御茶屋がそれ以前から存在していたことがわかる。また、建て替えしなければならないほど傷んでいたのなら、細川家入国(寛永9年)以前からあったのではないかと、とも考えられよう。南関御茶屋の創立がいつか、文献史料で確認することはできないが、元和元年(1615)、鷹ノ原城(南関新城)が廃城になるということが契機となって、関町に御茶屋が設置されたのではないかと推測される。

その後藩の記録に断片的に登場するが、具体的な様子はよくわからない。建物が描かれているのは、寛文10年(1670)の『南関御茶屋御指図』(熊本県立図書館蔵)



南関御茶屋跡

で、敷地は東西20間、南北25間で南向き、御玄関、御座敷なども南向きであった。このころの御茶屋の位置は、『玉名郡南関之図』（熊本学園大学図書館蔵）などを見ると、上町と中町の境（現在の南関町公民館の場所）にあり、街道に面していた。

街道から離れ、北側へやや奥まった現在地に御茶屋が建設されたのは、嘉永3年～5年（1850～1852）で、建て替えの理由として「年月がたち、古くなって狭くもあり、その上間取りも悪く、藩主が参勤交代で休泊する際混雑する」から、というものであった。その財源には、富講の売上金もあてられ、南関手永の幹部たちが「建て替え御用係」を拝命した。

南関御茶屋利用者としては、細川家はもとより、薩摩島津家、人吉相良家、宇土細川家などがある。現在話題の「篤姫」も、江戸参府の旅の途中、嘉永6年（1853）8月30日に南関御茶屋で昼休みをとっている。

ii 南関御茶屋跡の国史跡指定と保存修理

南関御茶屋跡は、街道沿いに御茶屋跡が現存し、往時の建物構造を残していることは極めて稀で、わが国の近世交通史を考える上で貴重な事例であることから、平成15年8月27日に国史跡の指定を受け、さらに国・県の文化財保存整備費補助金を受けて保存修理が行われた。建物修理が平成15・16年度、周辺環境整備が平成17～19年度に終了した。

iii 南関御茶屋跡の活用

- ・ 御茶屋跡を現代に活かす合言葉「見て、触れて、使ってはぐくむ文化財！」
- ・ 町民の文化活動の拠点としての位置づけ
- ・ 国指定文化財といっても、あくまで地元で根ざしたものであるから、地元の手で守っていくことが大切。管理人を雇って管理させるだけなら簡単だが、地元の文化財愛護の気持ちが育たない。
⇒ボランティア団体「南関宿場町伝楽人（なんかんしゅくばまちでんがくにん）」の結成が御茶屋跡活用のカギ
- ・ 会員の募集⇒40名の応募あり
- ・ 入館者への説明・抹茶の接待・史跡めぐり（予約制）のガイド、豊前街道の除草・清掃など
- ・ 伝楽人主催による年間数回のイベントを開催
 - 「白秋生誕際（1月）」
 - 「ひな祭り（3月）」
 - 「端午の節句バラと菊花展（5月）」
 - 「七夕まつり（7月）」
 - 「子どもボランティア活動体験（7～8月）」
 - 「国際交流盆踊り（8月）」
 - 「観月会（9月か10月）」
 - 「秋のバラ展（文化祭協賛、11月）」

◎御茶屋跡の年間利用者・入館者数＝約5,000人

iv 南関御茶屋跡周辺の見所

- ☆ 城ノ原官軍墓地（県）＝鷹ノ原城跡の本丸跡にある。西南の役で戦死した政府軍将兵77人の墓地。御茶屋跡前から遊歩道が設置されている。
- ☆ 正勝寺（しょうしょうじ）＝西南の役で、有栖川宮熾仁親王率いる政府軍の本営跡。
- ☆ 大津山下ツ宮のムク（県）＝樹齢500年以上、県下最大のムクの木、南関第一小学校校庭にある。
- ☆ 小代焼野田窯跡（町）＝幕末～昭和まで使用。小代焼の連房式登窯跡、焼成室6。
- ☆ 轟嶽城跡＝山の名は大津山、大津山初代資基が築いたとされる山城跡。雄大な堀切、縦堀跡が残る。
- ☆ 大津山阿蘇神社＝正治元年（1199）阿蘇神社を勧請したという。戦前は郷社。
- ☆ 大津山公園＝秀吉に茶の水を献じたとされる太閤水という湧水や、石造眼鏡橋のおこんば橋が移築されている。
- ☆ 旧豊前街道＝県内主要4街道のひとつ。熊本城下札の辻を基点に、豊前小倉まで通ずる。南関町域では、ほとんどそのルートをたどれる。
- ☆ その他＝現在は何も残っていないが、南関番所跡、高札場跡、構口跡などがある。

v 南関町の見所

- ☆ 肥猪町官軍墓地（県）＝大字肥猪町。180人の将兵が葬られている。
- ☆ 小代焼窯跡群（県）＝大字宮尾。瓶焼窯跡と瀬上窯跡がある。小代焼の発祥地。
- ☆ 来光寺の五輪塔（県）＝大字豊永。鎌倉時代、時宗の信者を供養するため建立。

近世宇土城跡と文化遺産の活用

宇土市教育委員会 藤本 貴仁

宇土大太鼓フェスティバル実行委員 田尻 正三

1 近世宇土城跡に関する歴史と城郭遺構

i 近世宇土城の築城

(1) 小西入国に至る経緯

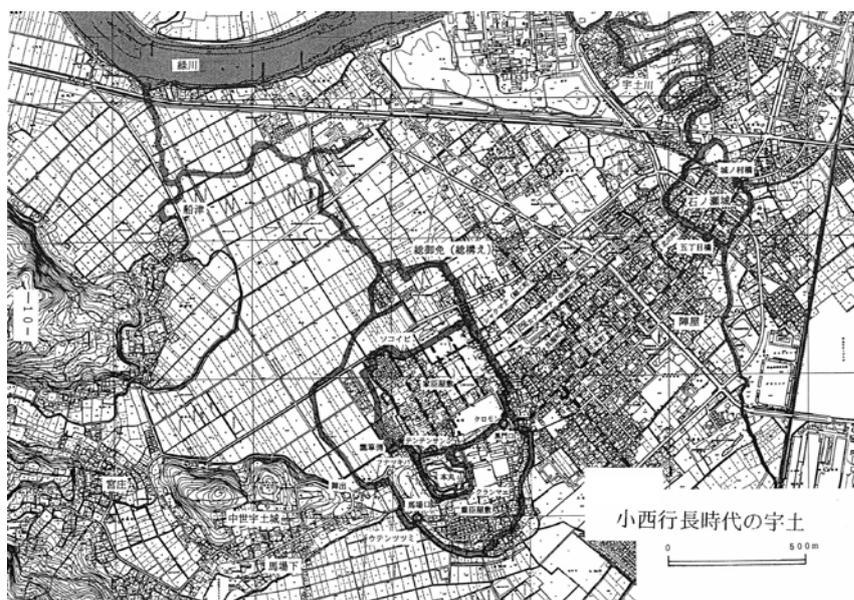
キリシタン大名として全国的にも著名な小西行長が、球磨郡を除く肥後南半部の領主権を得たのは天正16年(1588)のことである。それ以前の宇土は名和氏が80年余りにわたって領主権を有しており、その居城は通称「西岡台」と呼ばれる独立丘陵に位置する中世宇土城(宇土古城)であった。天正15年(1587)、豊臣秀吉の九州出兵により名和顕孝は宇土城を開城、大坂での人質生活後、筑前国・小早川隆景のもとに替地となり、宇土における名和氏の歴史は幕を閉じた。

一方、九州出兵後の肥後の政治状況はめまぐるしく変化し、秀吉は天正15年7月に発生した国衆一揆の責任を取らせて、佐々成政を改易し、切腹させた。一揆制圧後の残党弾圧などで肥後の国衆の多くは壊滅状態となったが、そのような状況下において秀吉は太閤検地を実施し、肥後54万石の石高を確定、小西行長と加藤清正に肥後の領主権を与えたのである。

(2) 近世宇土城の概要

行長は永禄元年(1558)に大坂・堺の豪商・小西隆佐の子として生まれた。秀吉の側近として水軍を率いて活躍した後、肥後に領土を与えられ、宇土に本拠をおいた。入国翌年には、中世以来の宇土城が存在した西岡台より東へ約300m離れた低地に、新城の築城(近世宇土城)と城下の整備に着手した。だが、築城開始からしばらくして、文禄・慶長の役で先鋒として二度にわたり朝鮮半島に侵攻しており、宇土において活動した期間はそう長くなかったと推察される。しかし、そのような状況下でも大規模な普請を行ったことは、現在判明している南北約500m、東西約550m、面積約20万㎡という城域の広さからもうかがえる。

近世宇土城とその城下の基本的な構造は、標高が最も高い地点(標高約16m)に、周囲に堀(内堀)がめぐる本丸、その西側に二ノ丸、東側と南側に重臣屋敷群が立地する三ノ丸、その周囲を幅約30~40mの外堀がめぐる。三ノ丸の北東部に大手、南西部に搦手があり、さらに本丸北側には「瓢箪淵」と呼ばれる船入りが存



小西行長時代の宇土 (高木 2000)

在した。

城下に関しては、本丸北側の「塩田」や中世宇土城南側の「馬場」などに武家屋敷（家臣屋敷）、城の東側にあたる本町及び新町（呉服町）周辺に城下町が形成され、さらにその東側に外郭としての石ノ瀬城や宇土川（船場川）が配置された。

このように、城と家臣屋敷、町屋などがセットになった典型的な近世城下町が、小西入国後の宇土に出現したのである。

ii 近世宇土城とその城下の様相

(1)本丸と重臣屋敷について

二度の破却やその後の改変などにより、近世宇土城は往時の姿はとどめていない。後代の『主図合結紀』の「宇土城図」や福島本『肥後宇土軍記』添付の「宇土城図」も遺存している城の地形とストレートに対応していないが、発掘調査の成果や文献資料及び字図などの検討から、おぼろげながら城と城下の様相を知ることができる。

本丸に関しては、昭和53年から57年に発掘調査が行われ、小西期（下層期遺構、1589～1600年）と加藤期（上層期遺構、1600～1612年）の2時期の遺構の重複が確認されるとともに、本丸の平面プランがおおむね明らかになった。本丸の石垣は打込ハギの石垣であることから、加藤期の改修に伴う造作である可能性が高く、石垣は横矢を多用する特徴がある。また、本丸で検出された下層期遺構の野面積み石塁のあり方などから類推して、小西期の石垣は野面積みと想定されるが、加藤期改修に伴う盛土によって内部に埋めこまれている可能性が高い。

行長の弟・小西隼人をはじめとする重臣達が居宅した三ノ丸に関しても、「三宮社記録」の重臣屋敷の配置状況の記述や、現在の三ノ丸周辺の長方形や方形を基調とする地割が、往時の区画を踏襲していると想定すれば、当地に存在した重臣屋敷はかなり整然と配置されていたとみられる。

(2)城下の様相

では、城下のようすはどうであろうか。『肥後国誌』には「…家士ノ屋敷ヲ定ム（中略）其外ノ諸士ハ塩田或ハ馬場村等ニ居住ス」とある。「塩田」は本丸北側一帯の古城町字塩田、「馬場村」とは西岡台南側の神馬町字馬場下周辺のことであり、後者は中世以来の集落を踏襲し、近世にも武家屋敷（家臣屋敷）が形成されたとみられる。また、現在の宇土市本町及び新町（呉服町）に町屋や小輩の屋敷があったという。

この塩田地区に関しては、明治期字図の土地区画や地目の状況から、碁盤の目状に一軒一軒が堀をもつ屋敷跡や運河の跡とみられる痕跡が残されており、このことを検証するため、平成12年に実施した発掘調査で、屋敷地を囲む大小の堀跡を検出した。屋敷地は間口が狭く奥行が長い長方形（短冊形地割）で、道に面した間口には木橋が架けられていたとみられるなど、極めて計画的な造成を行っていたことがわかっている。

iii 宇土城攻防戦と加藤時代の宇土城

(1) 肥後における「関が原」- 宇土城攻防戦 -

慶長5年(1600)、西軍に属した行長は関が原の戦いで敗れ、京都六条河原で処刑された。関が原の戦い直後、加藤勢は宇土城に攻め入り、約1ヶ月にもおよぶ激しい攻防戦が繰り広げられた末、宇土城は落城した。まさしく、その状況は「肥後における関が原」と形容するにふさわしく、『肥後宇土軍記』には、その戦いのようすが生々しく記されている。

これによると、加藤勢の加藤百介や吉村吉右衛門が率いる先陣は薩摩街道を南下し、宇土城の外郭線といえる石ノ瀬口(石ノ瀬城)で小西・加藤両軍が衝突した。その後、ここを突破し、城下に攻め入った加藤勢は本町などの宇土城下の町を焼き払い、「はたか城」(はだか城の意、『肥後宇土軍記』の記述より)にしたうえで宇土城に攻め込んだとされる。また、宇土城攻めの際、加藤勢の舟手・梶原助兵衛が本丸北側の「瓢箪淵」で、宇土城内の砲撃でのっていた船を撃沈され討死にしたとの記述がある。

(2) 宇土城改修と破却

戦いに勝利した清正は、肥後一円を支配することとなり、宇土城に城代に置き、自身の隠居所とするために大規模な改修を行ったが、隠居することなく慶長16年(1611)に死去した。本改修の規模や内容については、不明な点が多いが、二ノ丸西側の畑より慶長13年銘の滴水瓦が採集されており、その頃には完成していた可能性が高い。

清正の死の翌年には幕命により宇土城は破却され、さらに、寛永14年(1637)の天草島原の乱後に徹底的に破壊された。堀は埋められ、当時の石垣がごく一部にしか確認できないほどに著しく改変された現在の宇土城の姿は、この二度にわたる凄まじい破却のようすを今に伝えている。

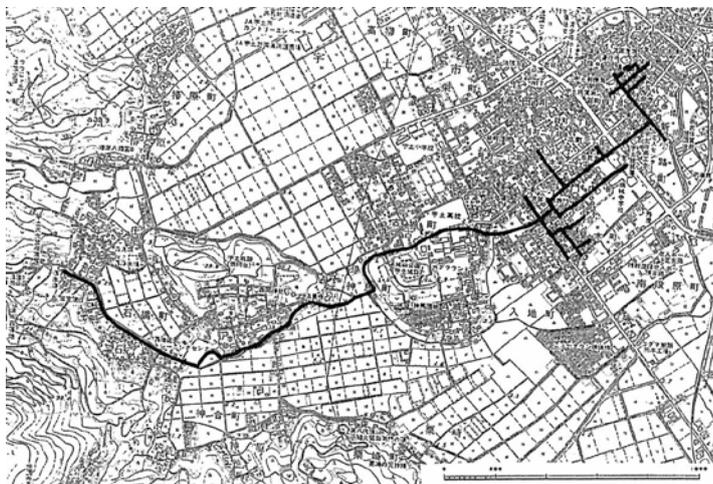
2 文化遺産の活用について

i 轟泉水道と馬門石

(1) 轟泉水道について

日本名水百選の轟水源より取水する轟泉水道は、現存する日本最古の上水道として著名であり、初代宇土藩主・細川行孝の命により寛文3年(1663)年に完成した。本水道が敷設された主な理由は、宇土支藩の陣屋や武家屋敷があった一帯の水質があまり良くなく、飲料用としては不適だったためといわれている。幹線と支線をあわせた総延長は約4.8kmで、当初は松橋焼の瓦質の水道管を連結する方法を採用した。

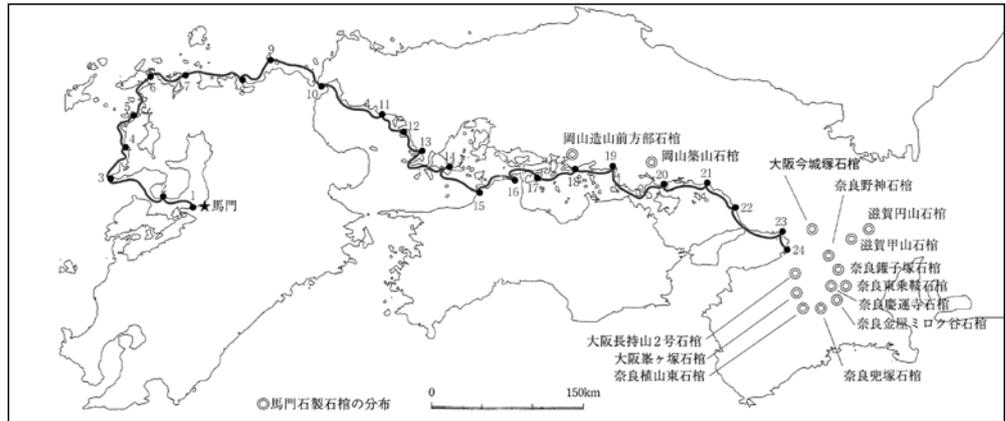
敷設から約100年後、水漏れなど老朽化が進んだため、明和6年(1769)頃、宇土藩第5代藩主・細川興文が宇土市網津町に産出するピンク色の阿蘇溶結凝灰岩(馬門石)製の水道管に総替えした。本水道管の連結には赤土・貝灰・塩・松葉の煮汁などで作った「がんぜき」と呼ばれる水の中でも固まるといふ優れた性質をもつ粘土が用いられた。そ



水道の経路 (舟田 1999)

の技術は轟泉簡易水道組合によって今でも継承されている。

現在、本組合により水漏れ箇所の修繕や、樹根の除去などの維持管理がなされ、宇土市街地の約100世帯が利用している。



(2)馬門石の活用

「海王」の海路 (大王のひつぎ実見航海実行委 2005)

- 大王のひつぎ実験航海を中心に -

轟泉水道の樋管の石材となっている馬門石は、高木恭二氏による一連の研究で明らかにされているように、古墳時代の石室石材や石棺材として利用された。5世紀後半から6世紀末頃にかけては、ヤマト政権を構成する有力豪族や大王(後の天皇)クラスの石棺として畿内や中国地方に運ばれたことが判明している。

これらの石棺がどのようにして運ばれたのかを明らかにするために、平成16年に大王のひつぎ実験航海実行委員会が組織され、真の継体大王陵とされる大阪府高槻市今城塚古墳から見つかった馬門石石棺片に基づき石棺を復元し、重量物運搬具である修羅と石棺を載せた台船を曳航する古代船「海王」が製作された。

翌年の7月24日に宇土マリーナを出航、海路約1,000kmを1ヶ月余りの期間をかけ、8月26日に目的地である大阪南港に到着し、その2日後には、約1,500人の大観衆が見守るなか、今城塚古墳で修羅曳きが行われた。その間の出来事は連日のようにマスコミに報道され、馬門石の名が全国的にも知られるようになったのである。



大阪南港へ入港する「海王」
(高木恭二氏撮影)

本実験航海は学術面のみならず、歴史を活かした地域づくりの観点からみても多大な功績を残したといえよう。航海の翌年からは海王を活用した乗船・漕行体験イベントが実施され、20年度からは海王の漕ぎ手ボランティアが組織された。去る7月21日には初めてのお披露目があり、有明海を見事に漕行したことは新聞紙上でも取り上げられた。

一考古学研究者の石棺研究から始まった取り組みは、現在では様々な方面に広がっており、「宇土地蔵まつり」にちなんだ馬門石製お地蔵さんの制作工房、国内外の芸術家が制作したパブリックアートの設置、馬門石にちなんだお菓子が販売されるなど多方面に展開している。まちづくりの面からも、馬門石の評価は着実に高まっているといえよう。

ii 宇土雨乞い大太鼓について

(1)宇土雨乞い大太鼓とは

宇土市には雨乞いに用いられた大太鼓が数多く現存している。平成元年から3年にかけて、ふるさと創生事業の一環として大太鼓26基の皮の張替えなどを実施し、平成3年に開館した「宇土市大太鼓収蔵館」で展示・公開している。平成14年には、これらの大太鼓と関連資料が県重要民俗文化財に指定され、その資料的価値は高く評価されている。

さて、雨乞い太鼓は、稲作を中心とする農業と深い関わりがある伝統芸能で、田植え後、その生育の過程でしばしば水不足になることが、このような雨乞いの芸能を生み出した要因と考えられている。雨乞い儀礼として太鼓を用いる理由としては、太鼓を叩いた際の大きな音で、空気を振動させて雨を呼ぶとともに、神社への奉納をおこなって神に降雨を祈願するとされている。

宇土の雨乞い太鼓は、ただ単に日照りの際の祈願行事だけではなく、ムラの神社への奉納行事という恒常的な年中行事として地域に定着していることが大きな特徴といえる。また、田植え後の順調な降雨や稲の生育、収穫を祝う農耕儀礼としての意味もあったようである。

ちなみに、ラフカディオ・ハーン著『東の国から』（1895年）のなかの「夏の日の夢」では、明治26年（1893）7月22日に長崎旅行を終えたハーンが三角西港に上陸し、人力車に乗って宇土半島を横断した際に、村々で雨乞い大太鼓が打ち鳴らされる様子が書き記されている。

(2)雨乞い大太鼓の特徴

宇土の大太鼓は、横から叩く「長胴太鼓」と上から叩く「ドラ太鼓」があるが、前者がほとんどで、後者は3基のみである。これらは全て一本のケヤキを刳り貫いて造られている。

また、宇土の大太鼓を最も特徴づけるものとして、長胴太鼓に「木星（きぼし）」とよばれる14面体の木製飾りが太鼓の周縁に付いていることである。この木星は、全国的にも宇土にしか存在しない極めて珍しいもので、おそらく鋳留めの技法が普及する以前は大太鼓の皮を木で留めていて、鋳留めが採用されても飾りとして残存したと想定される。

各地区に伝えられてきた太鼓のうち、最も古いものは慶安4年（1651）銘の明賢寺の太鼓であるが、面径は66cmと他の大太鼓より小型である。面径が80cmを超えるような太鼓で、製作年がわかるものとしては、平木地区の寛文13年（1673）の大太鼓が最も古く、他の地区のものも江戸時代から明治時代にかけて造られたとみられる。

(3)大太鼓の活用について

これらの大太鼓は、毎年8月に行われている「宇土大太鼓フェスティバル」でも叩かれ、市民の身近な存在となっている。以下では、大太鼓を活用した本フェスティバルが、宇土市民夏祭りとして定着していく過程をまとめた。

昭和50年当時、本市では8月に市主催「市民夏祭り・盆踊り」が市民グラウンドで行われていたが、参加する市民は数百人と今一つ盛り上がり



平成19年の宇土大太鼓フェスティバル

欠けるものだった。53年、市の財政改革によって各種民間団体で作る実行委員会に「市民夏祭り」が移管されたのを期に、本実行委員会は夏祭りの新たな活性化を模索した。

昭和60年、実行委員会は市の3地区（椿原町、城塚町、堂園町）に、宝くじコミュニティ基金で修復された雨乞い大太鼓があることに着目、翌61年にこの3基の大太鼓をメインにした第1回宇土大太鼓フェスティバルが開催された。

その後、ふるさと創生事業で皮の張り替えが実施された大太鼓を、いかにして有効に活用するかが課題であったが、実行委員会では当時、熊本県立劇場館長だった鈴木健二氏に協力を仰ぎ、行政や市民とともに協議を重ね、26基が一同に演奏できる曲や、100人の雨乞い踊りの振りつけを完成させた。江戸時代以来の雨乞い大太鼓は、多くの人々の熱意によって平成の世に再び命が吹き込まれたといえよう。

現在、本フェスティバルは本市の主要文化事業のひとつとなっており、今年で23回目を迎えたが、市民主導の事業として思わぬ副産物も生んでいる。本太鼓事業に関わってきた多くの人たちが、各方面で「まちづくり」に参画し、活躍しているのである。まさに、太鼓は宇土のまちづくりの基礎と言っても過言ではなからう。

主な参考文献

小田富士雄・高木恭二ほか編 2007『大王の棺を運ぶ実験航海 - 研究編 -』 石棺文化研究会

小島美子 2008「鉦留め太鼓の始まりの頃」『邦楽ジャーナル』Vol.255

高木恭二・木下洋介 1985『宇土城跡（城山）』 宇土市埋蔵文化財調査報告書第10集 宇土市教育委員会

高木恭二 2000「宇土城の縄張りとお西行長のまちづくり」『小西行長没後400年記念事業資料集』 宇土市教育委員会

大王のひつぎ実験航海実行委員会 2005「大王のひつぎ実験航海 - 復元から航海までの軌跡 -」パンフレット

藤本貴仁 2000「近世宇土城跡の発掘調査」『小西行長没後400年記念事業資料集』 宇土市教育委員会

舟田義輔 1999「細川行孝と轟泉水道」『宇土市史研究』第20号 宇土市史研究会・宇土市教育委員会

安田宗生・徳丸亜木ほか 2000『宇土雨乞い大太鼓調査報告書』 宇土市教育委員会

吉村豊雄 2007「小西氏の政治」『新宇土市史』通史編第2巻 中世・近世 宇土市

佐敷城跡と文化遺産の活用

水俣葦北地名研究会 深川 裕二

1 佐敷城跡

佐敷城は、薩摩の島津氏及び球磨郡の相良氏に対する備えとして築かれた、加藤氏の端城である。城跡は、芦北町大字佐敷及び花岡に位置し、地元住民が「城山（しろやま）」と呼ぶ標高約85mの丘陵一帯を城域とする。

城山の東側を流れる佐敷川は、城山を迂回するように城山東側山裾の旧佐敷町付近で北向きに流れを変え、さらに城山の北側で大きく西向きに屈曲し、河口部で湯浦川と合流して佐敷湾に注いでおり、城山の東、北、西の三方は佐敷川に囲まれている。城山の西側、芦北地区は18世紀後半の干拓により誕生した土地で、干拓以前は城山の西側山裾まで佐敷湾が大きく湾入していた。

城山は、戦前から佐敷地区住民の憩いの場として親しまれていたが、昭和53年に都市公園開発事業計画により、第1次発掘調査が実施された。調査の結果、本丸一帯から石垣が出土し、また屋根瓦片も多数見つかるなど近世城郭の存在が確認され、昭和54年に芦北町史跡に指定された。

平成に入り、佐敷城跡整備を核とした地域活性化策が真剣に議論されたが、その整備方針を巡り、一時、地域住民の意見も大きく割れた。しかし、最終的には平成5年からの発掘調査の成果を検討し、石垣復元を中心とする史実に基づいた整備を行うことに決定した。平成10年3月に整備事業は完了し、同月、熊本県史跡に指定された。

現在、城域一帯は歴史公園として開放され、郷土史学習の場として利用されている。また、「佐敷城跡観月会」の会場として、我が国の伝統文化に親しむ場ともなっている。今年3月には国史跡に指定され、地域住民と行政が一体となって進めてきた歴史遺産を活用した地域づくりは、着実に進んでいる。

佐敷城の歴史

現在、一般的に佐敷城と呼ばれる近世佐敷城の正確な築城年代は不明であるが、加藤清正が肥後半国の領主として入国した天正16年（1588）以降と考えられる。重臣の加藤与左衛門重次が城代を勤めたが、清正とともに朝鮮半島に従軍していた文禄元年（1592）、島津家臣の梅北国兼の軍勢に城を一時占拠される事件（梅北の乱）が発生した。この梅北の乱の顛末を記した「井上弥一郎梅北一揆始末覚」には、「本丸」、「追手之門」、「座敷一間」等、当時の佐敷城の構造が記され、この頃には完成していたと考えられる。

慶長5年（1600）、関ヶ原の戦いの余波として、島津軍が同じ西軍方で宇土城に籠城する小西軍を支



佐敷城跡と佐敷川

援するため、佐敷城を攻撃したが城代加藤重次が「佐敷之城堅固ニ相抱」えたため、「水俣ニ引取」っている。その後、肥後国内の有力支城として整備されるが、元和元年（1615）の一国一城令により、鷹ノ原城・内牧城とともに廃城となり、破却された。

発掘調査の成果

城の構造は、総石垣造りの本丸、二の丸、三の丸を南側に階段状に配置し、高石垣と虎口で曲輪を連結している。一方、北西、北東、南東に派生する尾根上には出丸が置かれたが、本丸近辺以外では石垣は用いられず、自然地形を巧みに利用している。尾根続きとなる南側には堀切を設けて、城域をコンパクトにまとめている。城は、城下町と薩摩街道が通る東側を大手（正面）とし、大手方面には城下を威圧するように山上に高石垣を築き、枡形虎口を備えた城門が三つ連続している。また、東側山裾でも石垣が出土し、さらに水堀が設けられるなど、麓曲輪を中心に嚴重な防御が施されている。

石垣は、使用石材や積み方の違いなどからⅠ～Ⅲ期に分けられる。Ⅰ期石垣は、石灰岩が主に用いられ、大きさが不揃いの野面石と粗割石を併用した野面積みである。Ⅱ期の石垣は、石灰岩、チャートのほかに安山岩の粗割石を用い、一部では薄い板石を用いた鏡積みが確認されている。隅角部は算木積みの形を取っていない。Ⅲ期石垣は、矢穴痕をもつ規格化された安山岩の割石を用い、積み方は目地が通った布目積みで、隅角部は完成された算木積みになっている。石垣のプランは直線的で複雑に折れを用いている。Ⅲ期石垣の裏込め石（栗石）とともにⅠ期、Ⅱ期石垣が出土しており、改築の際に古い石垣を埋め殺して、その外側に新たな石垣を築き、曲輪の拡張や通路の付替えが行われている。

石垣築造の時期について、各時期の石垣に伴って出土した瓦片の特徴から、時期を推測することが出来る。ただし、Ⅰ期石垣と共伴する瓦片は無く、築造時期を推測する手掛りは得られていない。Ⅱ期石垣は、石垣沿いに布目痕・タタキ痕を持つ朝鮮半島系瓦が出土していることから、朝鮮出兵以降慶長の始め頃と考えられる。Ⅲ期石垣からは和瓦の破片が大量に出土し、これらの瓦の中からⅢ期石垣の築造年代を示す慶長十二年（1607）銘入軒平瓦が見つかった。



Ⅰ期石垣



Ⅱ期石垣



Ⅲ期石垣

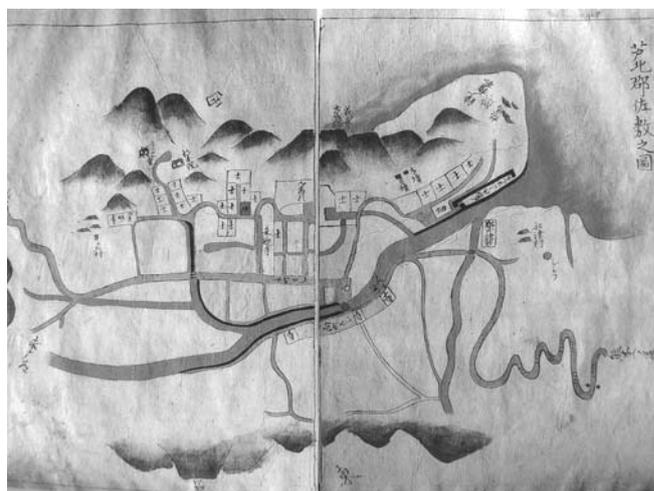
破城

佐敷城は、元和元年の一国一城令で廃城となり、加藤氏の手で破却された。加藤氏改易後の寛永15年（1638）、徳川幕府は天草・島原の乱に対する戦後処理の一環として、九州の各大名に古城の調査と破却を命じている。『部分御旧記 城郭部』同年6月7日付けの戸田氏鍔（天草・島原の乱時の幕府副使）宛て細川忠利書状では、「佐敷・みな侯と申所、古肥後守時城御座候を割申候つる、堀も埋申石垣は勿論崩候へとも、端々ニ石之見へ申候所少ハ御座候（中略）それも石をのけさせ申候…」と、佐敷城と水俣城について前領主の加藤氏による破却が不十分であったため、改めて石垣を取り除いたことを報告している。

発掘調査で確認された破城の痕跡として、石垣では、隅角部に最も破壊の痕跡が見られた。特に、出隅部分では角石が根石近くまで除去されているのに対し、入隅部分は比較的残りが良い。一方、石垣が直線的に延びる面では、上部が均等に崩されていた。

通路及び城門は、崩した石垣の石材と栗石で覆い隠され、特に城門の石段踏石はいずれも途中から取り除かれていた。追手門では、天下泰平国土安穩銘鬼瓦が瓦溜り最下層から完全な状態で出土し、屋根から外した後に丁寧に据え置かれたことが判明した。この鬼瓦手前の石段踏石一個のみが外されて近くに放棄してあり、廃城時に何らかの儀礼があった可能性を示すものとして注目される。本丸西北部通路出土の桐紋入鬼瓦も、同じような状態で出土している。

また、通路を覆い隠して崩された栗石上層から、寛永通宝が出土した。この寛永通宝は、寛永13年（1636）以降に鑄造された「古寛永」で、肥後北端の鷹ノ原城でも古寛永出土の報告があり、肥後国内の破城の推移を示す手掛りかもしれない。



芦北郡佐敷之図

城と城下町の形成

城下町である旧佐敷町は城山東側山裾に位置し、向町、本町、上町、新町に分けられる。向町は佐敷川右岸部に位置するが、ほかには左岸部にあり、薩摩街道沿いに町屋が形成されている。明和9年（1772）に作成された「芦北郡佐敷之図」をみると、細川藩政下に国境警備にあたった佐敷御番の武家屋敷が、佐敷番頭役宅を中心に城山の山裾に配され、南北に走る水路を挟んで薩摩街道沿いの町屋と区別されており、加藤氏時代の区画を引き継いだものと考えられる。町の出入り口には木戸が設けられ、また、向町の東西両端には寺院が置かれるなど、国境付近の要衝の雰囲気を感じられる。

旧佐敷町の対岸、佐敷川右岸部の花岡地区には、中世相良氏時代の佐敷城と城下町であった可能性がある「佐敷東の城」と「花岡古町遺跡」がある。佐敷東の城は、「城山（じょうやま）」と呼ばれる標高161mの山上にあり、南側山裾には相良氏時代に現在地に遷座したといわれる佐敷諏訪神社がある。近年の調査で、県内有数の規模と構造を持つ中世城郭であることが確認された。西側山裾の柵地区には、

城主、家士が在居したと『肥後国誌』に記されている。拵地区と佐敷川右岸部に挟まれた場所にある花岡古町遺跡では、県文化課の調査で13～15世紀にかけての集落跡がみつき、遺跡内からは庇付き建物をはじめ多数の掘立て柱建物跡が検出され、青磁や白磁などの輸入陶磁器も数多く出土している。戦後の圃場整備により、遺跡上層が削平されているため遺跡の廃絶時期は判っていないが、前出の「芦北郡佐敷之図」では花岡古町遺跡付近に町場は描かれていない。今後、佐敷東の城の発掘調査を実施し、中世と近世、二つの佐敷城と城下町の位置を確定することが求められる。

2 文化遺産の活用

佐敷城跡活用と佐敷宿整備

毎年9月の中秋の名月に開催される「佐敷城跡観月会」は、佐敷城跡の特色ある活用事例の一つである。

「佐敷城跡観月会」は平成10年に佐敷城跡が熊本県史跡に指定されたことを記念して始まり、以後、昨年まで10回開催されている。観月会では、葦北鉄砲隊や県内武道各派による模範演武のほか、佐敷城跡二の丸に特設された能舞台で喜多流喜秀会による薪能が披露される。満月の月明かりに照らし出された石垣を背景に、かがり火のもとで繰り広げられる能や狂言などの伝統芸能により非日常的な幽玄の世界を味わうことができ、町内外から多くのファンが訪れている。

また、佐敷は江戸時代から戦前にかけて芦北地方の政治、経済の中心地として発展したが、佐敷城下を通る薩摩街道沿いには、旧佐敷町の面影を残す歴史的町並みが残っている。街道沿いの建物は、街道に対しやや斜めに建てられており、これが連続するとのこぎりの刃のように見える「のこぎり家並み」が、わずかに残っている。建物は、間口が狭く奥行きが長い町屋構造になっており、坪庭や屋敷神の祠が敷地内に配されている。

現在、佐敷地区町並み保存会が結成され、平成12年に締結された景観形成住民協定に基づき、外付け看板の撤去などの修景事業が進められており、芦北町では改修費用の一部補助等の支援を行っている。今年4月には、町並みの中核施設として古い商家を改装した「薩摩街道佐敷宿交流館」(通称:佐敷本陣「枺屋」)が完成し、芦北町では佐敷地区町並み保存会と連携しながら、観光ルートの整備やボランティアガイドの育成などを進めている。

葦北鉄砲隊

細川藩政下、薩摩、相良両藩との国境を警備する目的で、寛永11年(1634)に葦北郡筒が組織され、以後、明治3年(1870)に廃止されるまで、葦北郡内各所に設けられた番所の警備にあっていた。葦北郡筒は、平



薩摩街道 (佐敷の町並み)



葦北鉄砲隊 観月会での演武

素から剣術や棒術、柔術、馬術などの武芸の鍛錬に励み、特に砲術は稲富流や大田流、三破神転流などの流派が伝わり、火縄銃のほかに火矢や石火矢の習得も行っていた。

この芦北に伝わる伝統砲術を継承し、葦北郡内で活躍した葦北郡筒を顕彰するとともに、伝統文化の振興を図ることを目的に、平成15年に町内有志により葦北鉄砲隊が結成された。

以後、県内はもとより、全国各地で年間50回以上の演武活動を行っており、我が国を代表する砲術団体の一つに数えられている。平成17年には、イギリス・リーズ市にある王立武器博物館の招待を受け、リーズ、ロンドン両市で演武活動を行うなど、国内外から注目を浴びている。

打瀬網漁

打瀬網漁は、風と潮の力を利用して袋状になった7つの網で海底近くにいるエビやカニ、カレイなどを引き上げる伝統の底引き網漁で、『熊本県漁業誌』によると明治14、15年頃に瀬戸内地方（一説には明治18年に高知県）から伝わったといわれ、地元では、「(芸州)流し」と呼ばれる。

最盛期の昭和年間には、八代海沿岸一帯で1,000隻以上の打瀬船が操業していたが、現在は芦北町内のほか、津奈木町や鹿児島県出水市にわずかに残るのみで、芦北町の計石港が最大の拠点である。

計石港を母港とする打瀬船は20隻ほどで、年間を通じて操業を行っている。また、観光うたせ船組合に申し込むと、船一隻（定員12名）を貸しきって、漁場での打瀬網漁見学や太刀魚釣り体験、船上料理を味わうことができ、年間約6,000人が利用している。平成17年にはエアコンや水洗トイレを備えた「レディース船」が就航するなど、観光客開拓の新たな取組みが始まっている。

青い海の上を、4本のマストと前後に突き出た2本の竹に張った大小7枚の白い帆が、潮風をいっぱいを受けてふくらむその姿は、「白いドレスの貴婦人」と称され、芦北町の特色ある景観の一つである。平成18年には、水産庁が選定した「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産百選」の一つに選ばれている。



うたせ船

江戸時代の肥薩を訪ねてみたい

街道を歩こう会 歩き人 吉本 憲夫

10年と少し前までは、江戸時代の道を求めて、あちらこちら歩き回るとは夢にも思っていませんでした。いま思えば、ある日突然、と言ってもいいくらいです。

では何故そうなったか、自分でもよくわからないのですが、よくよく辿っていくと一冊の書物に行き着くのです。

水俣市を南下してしばらく行くと、すぐに鹿児島県に入りまして、そこは出水市です。出水は武家屋敷群が有名ですが、たまたま暇つぶしに立ち寄ったことがありました。案内の方に武家屋敷の丁寧な説明を受けましたが、その時お客は私一人だったこともあり、そのまますぐに立ち去るのが悪い気がして、寄付金のつもりで、そこに並べてあった出水市教育委員会発行の本を三冊買って帰りました。(『出水の旅物語』・『出水の生活伝承』・『出水の文化財』) その中の一冊『出水の旅物語』が私を街道へ導いたのです。

しかし、寄付金代わりのつもりでしたから、すぐ読むこともなく、数ヶ月は家の中に放置されていました。その頃は何故か仕事に意欲がわかないようになり、たまに海釣りに出かける程度で、日々の目標もなく精神的に行き詰まっていた。

そんなある日、あの本のことを思い出して、さしたる期待もなく取り出してみました。ところが意外にも、特に『出水の旅物語』は、私に驚異の感動を与えてくれました。それは次のようなことです。



吉本氏旅姿



薩摩街道の書籍

今のような車がなかった時代には・・・

- 1) 一つの山を越えて向の山里に歩いていくのも旅。
- 2) 明治、大正時代の小学校・高等小学校の生徒たちが何日もかけて歩く修学旅行も旅。
- 3) 遠方の旧制中学から徒歩や乗合馬車を利用した帰省や離郷も旅。

見方を変えると・・・

- 4) 仇討ちの探索も旅。(『南兄弟(出水蘇我) 仇討ちの旅など』)
- 5) 西南戦争の行軍や敗走も旅。

そして私を決定的に変人ならしめたのは、江戸時代の次の著名人たちです。

- 6) 漢学者 頼山陽・勤皇の志士 高山彦九郎・大坂の紙商人 高木庸之(やすゆき・善助)らの肥後、薩摩への旅。

彼らの旅日記を読むと、初めての地を踏む喜びと、予想外の出来事に苦勞する旅の姿があり、何度も読み返したものです。そして、彼らも歩いた薩摩街道（出水筋）の道筋の説明文は、私に行動せよという命令文みたいなものでした。

いろいろな資料を集めて調べ、そして歩き出したのは良かったのですが、2、3キロも歩くと足が痛くなり呼吸も乱れる始末、運動不足で先が思いやられる状態でしたが、そのうち、街道以外の山道なども歩くようになり、少しずつ体力を付けていきました。

次に、街道を実際に歩いてみて私が感じたことをまとめてみました。

昔の旅人たちに感化させられた私が心がけたことは・・・

- A) 昔の旅人の思いを感じるために、出来るだけ道筋に忠実に辿ること。
- B) 道筋がはっきりしなくても、すぐに諦めず地形などを見て探ること。
- C) できるだけ地元の人に聞いてみる。思いも寄らぬ話が出てくることも。
- D) 怪しまれぬように、必ずリュックを背負い、片手に地図などを持つこと。
- E) そして朝から出かけるときは、別の楽しみも得るため、リュックに弁当を。

薩摩街道を歩いてみて驚いたことは・・・

- F) 余程の障害物や無理がない限り、南北へ最短距離で進み、仮に山があっても真っすぐに登る。
- G) お米大切の時代、大名行列といえども、出来るだけ田畑を避けて通る。
- H) 薩摩側ではほとんどないが、肥後の三太郎峠ではよく山の尾根を利用している。

薩摩街道を歩いたとき失敗したことは・・・

- I) 薩摩大川駅に車を置き、川内駅まで道筋を調べて歩いていて、道を間違え山中で日暮れ。闇夜をさらに2時間ほど歩き、なんとか国道まで出てタクシー。四千円程也
- J) 別の日、串木野駅に車を置き、東市来の湯之元駅まで探るつもりが、やはり夕方に市来山中で道を間違え、歩けば歩くほど山奥へ。暗くなって民家もなく、前回に懲りて今回は携帯電話を試すが圏外。さすがに不安が襲う。なんとか人家の灯りを見つけて電話を借りる。三千円程也。

失敗も旅のうち、後になってみればよき思い出です。例えば頼山陽に至っては、『出水の旅物語』を要約してみますと「文政元年九月七日、水俣から肥薩国境を越え、米ノ津の野間の関所へ向かう時、蓑も飛ばされそうな風雨となってしまった。びしょ濡れになりながら関所に着いたが身なりが怪しいのと門限ぎりぎりと言うこともあって、役人からひどく怒られ通して貰えず、仕方なくまた、風雨の中を片道7キロほど引き返して、なんとか国境近くの肥後側の農家にとめさせて貰った」そうです。あの頼山陽をしても然りなのです。でも次の日の朝、爽やかな朝日を浴びて、何事もなかったように薩摩を目指して歩いていく山陽の姿が思い浮かぶのです。



街道を歩こう会の活動風景

水俣城跡と文化遺産の活用

水俣市教育委員会 正岡 祐子

1 水俣城跡

水俣城跡は、水俣市古城1丁目にあり、水俣川の右岸に東西方向に延びる標高約30m～50mのシラス丘陵上に形成されている。従来は丘陵の西端の「古城（ふるしろ）」「高城（たかしろ）」と呼ばれる部分が城域として捉えられ、昭和40年（1965）、市の文化財第1号に指定したが、近年では、更に東に続く丘陵でも豎堀や曲輪状の地形が確認され、水俣城は、広域な城域を持つ城として指摘されている。

古城と高城部分については、昭和30年代から公園整備が行われており、「城山（しろやま）」と呼ばれ市民の憩いの場として親しまれている。

城郭の本格的な調査はほとんど行われておらず、公園内の東西に位置する古城（標高約28m）、高城（標高約38m）は、それぞれ最高所を取り巻くように数段の平地があり古城側では石垣や石材が散布するなど、城郭らしい地形を残しているが、公園整備を始め宅地や道路など周辺の地形の改変も進み、遺構や縄張りの確定も困難になっている。



水俣城遠景（古城・高城）

築城～戦国時代

築城年代はよくわかっていない。『求麻外史』には正応元年（1288）に元寇での功績で菊池武房から芦北郡の一部を与えられた相良頼俊が築いたとある。南北朝期には、八代庄の地頭名和氏が派遣した内河義真の家臣本郷家久が在城したという。史料では、至徳2年（1385）に九州探題今川了俊が薩摩国御家人渋谷重頼に与えた感状（『入来院家文書』）の中に「水俣城合力之由」とあるのが初見である。

室町・戦国期には相良氏の城として存在し、島津氏の領地に隣接した水俣は水俣川上流の宝川内・久木野とともに両氏の領土紛争にさらされた。また14代相良長祇が水俣で自害させられるなど、相良氏自身の内紛で血に染まる場となったりもした。

天正9年（1581）には、大軍を率いた島津義久との合戦で、18代相良義陽がその配下に下り、八代・葦北を手放すことになる重要な戦いの場となった。以後水俣は秀吉の島津征伐まで島津領であり、天正15年（1587）に津奈木とともに秀吉の直轄領となり相良氏の重臣深水宗方が水俣城代兼代官となった。

なお、城周辺には「熊陣山」「隈（球磨）迫」など相良氏に関連すると思われる地名も残る。

加藤清正と水俣

深水宗方が天正18年(1590)に死去した後、水俣城は相良家家臣、寺沢志摩守と続き、慶長3年(1598)には寺沢氏の大名領、翌年は小西領とめまぐるしく代わっていた。慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いの折、市の南部に位置する袋の陣原付近は、清正について水俣軍と、西軍について島津軍との戦いの場になったという言い伝えがあり、「陣原」の地名や、その戦死者を祀る「千人塚」「仏石」がある。仏石は、水俣最後の代官深水頼寛が祖先を弔うために建立した。

関ヶ原の戦い後、水俣は清正領となり、清正と親類関係にあった中村将監が水俣城代となった。この時城は改修されたと伝わる。しかし、清正死後の翌年、慶長17年(1612)、幕命により宇土城・矢部城と共に破却され、近世城としての水俣城の存在期間は短かった。将監は後に仏門に入り、源光寺(水俣市浜町)の開祖となったという。また、城の西側には、清正を祀るため将監が建立した寺(妙勝寺)が前身で、明治の廃仏毀釈運動で神社になったと言われる加藤神社がある。

細川入国後は深水宗方の系譜が水俣の総庄屋兼代官を世襲した。

城郭についてーこれまでの調査の成果ー

城の規模や構造に関する史料は乏しく、不明な点が多いが、平成18年(2006)、公園の災害復旧工事に伴い、東側の高城において城内初となる発掘調査が行われた。

調査では、15～16世紀の戦国期の遺構であると推定される柱穴と土坑が確認され、土師皿、染付、青磁片のほか、鉄製品などの遺物が出土した。また、斜面に土を盛り造成したと思われる形跡が土層断面から確認でき、これは地形の傾斜を無くし、長期的に建物などを建てるために行った基礎工事跡と考えられる。調査範囲が狭小で復元は困難であるが、柱穴は並ぶと思われるものもあり、調査地の立地場所と基礎工事の形跡から見て、遺構は城郭に関連するものである可能性があり、わずかではあるがその時代の様相を知る手がかりが得られた。

一方、近世に改修を受けと言われ、現在でも石垣石材や瓦片が散布している古城側では、昭和53年(1978)、グラウンド工事中に古城の北側で石垣が残存しているのが確認されて以来、詳しい調査は行われていないが、石垣の矢穴の加工痕などから見て、石垣の構築時期は芦北町の佐敷城のⅢ期改築(慶長12年頃)に近いと思われる。また早い時期で関ヶ原の合戦後、清正が隈本城築城に着手する慶長6年(1601)までさかのぼる可能性はある。これまで採取されている瓦片の紋には桔梗紋、かたばみ紋などがあり、瓦の製作技法から見ると早い時期で天正16年(1588)までさかのぼることが可能である。

なお、平成19年(2007)に行われた下水道工事に伴う確認調査では、公園の通路の舗装の下から、これまで確認されているグラウンド横の石垣の延長部分が発見された。このことで、幕命による破却や後の公園造成などで破壊を免れた石垣が公園の地表下にまだ残存していることがわか



水俣城石垣検出状況

(昭和53年:現在も2段目までは見られます)

り、今後の調査が待たれる。

城下町の形成

水俣市内の西部には近世に参勤交代道として定着した薩摩街道が通っている。街道は、水俣城の縄張りの西側を通り、丘陵を下りきったところで東西方向に向きを変え、城の南側を古城から陣内に向けて通っている。また、古城には大口方面に向かう「大口筋」の分岐点もあることから、中世の街道の位置は不明であるが、街道が江戸に入り急に整備されたものではないと考え、水俣城は交通の要衝の地に築城されたと言える。

また、水俣城があった時代は地形的に背後に水俣城、目前に水俣川があり、古町という字名もあった現在の古城付近に町屋が形成されていた可能性もあるが、それを示す史料や調査事例はまだ無い。水俣城破却後、侍やその家族は熊本に引き上げており、その後の城跡の利用形態は明らかではないが、その後、会所や高札所が水俣城から西の陣内に置かれた。また水俣は往還宿とも呼ばれる宿町に位置づけられるが、参勤交代の休憩や宿泊に利用された御本宿も陣内にあったことから、水俣の中核の機能は陣内に引き継がれたものと思われる。

2 文化遺産の活用

水俣城発掘調査の成果の公開

水俣城の発掘調査については、城内で初、ということだけでなく、水俣市では調査自体の事例が少なく、なじみが薄いものであったことから、その目的や調査を行うことになったきっかけ、そして成果について市民に広く知っていただく取り組みを行った。

調査期間中については、発掘調査の現場において説明会を行い、120名の参加があった。周辺住民にあっても、城としての印象が薄かった水俣城であったが、多くは「身近にこんな文化財があった」「何も残っていないと思っていた」という驚きと喜びを持って成果を受け入れていただいた。

なお、調査終了後は、調査成果を簡易にまとめたリーフレットを発行したり、市役所ロビーにおける速報展を開催した。また、より水俣城という文化財を身近に感じていただくために、石垣石材の分布調査を市民参加で行ったところ、予想を上回る参加者があった。

薩摩街道

市域の西側を通る薩摩街道沿いには、標柱を整備し、道筋を示している。街道自体の復元整備は行っていないため、既に国道などの舗装道路になっている部分も多いが、周辺の文化財とも併せて、街道の概要やその存在をアピールすることには非常に寄与している。なお、市では薩摩街道を歩くイベントなどを行い活用している。



水俣城跡発掘調査現地説明会

櫨と蝋燭

水俣市内には江戸時代の細川藩の政策による櫨栽培が行われ、戦後も引き継がれていたため現在でも櫨の木が多いが、特に侍地区から陣の坂までの間は「御内家畑」と呼ばれ多くの本数が残っている。「宝暦はぜ」は、樹齢200年を超えるといわれる巨木である。

水俣市では、特産品である櫨を振興する拠点として「侍街道はぜのき館」を設置し、蝋燭や櫨に関する資料を展示するほか、ろうそく作りの体験教室などを行っている。

徳富蘇峰・蘆花

水俣は徳富蘇峰・蘆花が生まれた地であり、生後から父の徳富一敬の熊本藩庁出仕に伴い熊本に移転するまでの幼少期を過ごしており、その生家と記念館がある。生家は、蘇峰・蘆花の生家であるという史跡的価値のほか、築造年がわかる町屋づくりとしては県内最古という建築学的価値も持ち合わせており県指定史跡になっている。蘇峰・蘆花についてだけでなく徳富家の歴史にも触れることができる。

また、水俣市立蘇峰記念館は、もとは蘇峰の寄附により昭和4年に建てられた町立図書館であったが、市立図書館が新たに整備されてからは、蘇峰・蘆花兄弟の資料を収蔵・展示する記念館として活用されている。資料は蘇峰の遺族から寄贈された資料を中心に、蘇峰自身の著作のほか蘇峰が所有していた書籍、遺品や掛け軸、書簡など約3000点にのぼり、今も研究に訪れる人が絶えない。また、昭和初期のコンクリート建築の好例として、国の登録文化財にもなっている貴重な建築物でもある。



薩摩街道の活用（県境の境橋にて）



宝暦はぜ（水俣市江添）



徳富蘇峰・蘆花生家（水俣市浜町）

水俣市の文化遺産と地域おこし

株式会社福田農場ワイナリー 代表取締役 福田 興 次

水俣市では、歴史・多面分野・本質を活かした活動を各地で行っております。「宝暦の改革」のとき植えられた、樹齢約250年のハゼの木の巨木があります。その、侍地区には「侍街道はぜのき館」という資料館があります。ハゼの実から精製し、和ろうそく作りを体験することも出来ます。

なお、エコを推進している福田農場「スペイン村」では、資源の再利用をしています。たとえば、柱や梁(はり)、そして階段などには、今は無きJR山野線の枕木の廃材を使用しています。石畳みには地元の石を、滑り止めに廃ビンを、またプランターにはワインの樽を真二つに切り、季節ごとに花を植え替えています。面白いものとして、工場内の渡り廊下にはボーリング場のレーンを、レストランのテーブルには各メーカーの足踏みミシンの廃材を再利用しています。ご来場された折りは、懐古の思い出を探すのはいかがでしょうか。

今後もこのような文化遺産を活かした地域の活性化により多くの方と取り組みたいと考えております。



ボーリング場のレーンを再利用した廊下



福田農場「スペイン村」の一角



はぜ蠟から製作されたろうそく